
女神しか知らない恋の道!??

零香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神しか知らない恋の道！??

【Nコード】

N5478Z

【作者名】

澪香

【あらすじ】

平凡女子の天川奏と不良男子？の柳澤零が描く恋愛＋SF＋ファンタジーの学園ストーリーです

第一話 小さな出会い

キンコーンカンコーン

鐘の音が学校全体に響く

「今日は転校生が来てまーす」

加藤^{かとう}先生は勢いよくドアを開けながら言った

先生が黒板に転校生の名前を書いている読んでみると柳澤零^{やなぎさわれい}と書いている

「自己紹介よろっ」

「神道高校^{かみどう}から来た柳澤零……です」

神道高校？聞いたことがある……

「神道高校ってあのヤバいくらい有名な？」

教室がザワザワしている

「静かに、零君は窓側の一番後ろの席ね！ー」

うそ……私の隣じゃん殺されるって

さっき思い出したが神道高校は生徒のほとんどが不良で有名だった

「おまえ名前は？」

いきなり名前を聞かれた初対面なのにその言い方あり？

「あ……天川奏で……です」
あまかわかなで

「あつそ」

聞いてきたのそっちだろ あつそ って何だ

零は席に座ると授業の用意をしている不良じゃないのか？？

一時間目は数学だった

「おいっ教科書を忘れたから」と言い手を出す

えっ私に言ったの……そりゃあ隣の席だしね……怖いよお

私は不良男子（零）に向かって目を合わせずに教科書を渡した

「ありがとう」

不良に感謝されたぞ……おいってかこいつ本当に不良か？？

「零ってやつ不良なの？？かなっち」

放課後になると静川結花しずかわゆかが質問してきた

「知らないよ そんなの全く話してないし……」

「ええゝ十回は話してたくせに」

確かに十回は話したっていうか話かけられたからしかたなく・・・

「まあいいや 帰ろっか」

朝 学校へ行くときは雨が降っていたが今は晴れていた

「ねえかなっち 神道高校ってお化けがでるらしいよ」

「ええゝお化けもいて不良もいるって超ヤバイじゃん」

今日は私にとっては大きい出来事だったが世にとっては小さな出来事でしかなかっただろう・・・

第二話 女神に会っちゃった!??

今日は晴れだった不良男子（零）に出会ってから晴れの日が続いてる

いつものように学校へ行く用意をしていた

異変に気づいたのは顔を洗つてるときだった

「その娘・・・ここはどこじゃ、冥界めいかいか天界てんかいか?？」

私はビクリして顔をあげると鏡には私の顔に似ている人がうつっている

「だ・・・誰・・・家には私しかないのに・・・」

私は後ろを向く・・・誰もいない　ていうか冥界って何?天界って何

「わらわはアポロンじゃ　お主は・・・」

アポロン?冥界?天界?何それ?????

「わ・・・私は天川奏・・・」

「奏???もしかここは人間界にんげんかいか??」

はあ???何だこいつ人間界?人間が住んでるのはあたりまえだろ

「人間じゃなかったらお前は何者なの!!」

「わらわは女神じゃ 天界の者じゃ」

天界の女神??アポロン??あれ??ギリシャ神話で似たような事を聞いたことがあるぞ

私はふと時計を見る7時35分

「ヤバッ、学校に遅れちゃう・・・」

アポロンだかも気になるが今は学校へ行かないと・・・

キンコンカンコン

学校の鐘の音が聞こえる

私は急いで階段を駆けている

2年生の教室は3階なので、もう息がハアハアしている

2年B組の教室の前に来るといったん止まって息を整えた

「遅れてすみません!!」

教室中に私の声が響きわたった

教室を見ると誰もいないように見えたがよく見ると一人の男子が学校の用意をしている

「よお奏お前も遅れたのか」

声でわかった不良男子の零だ

「しかたないじゃん！！いろいろあったんだから」

「女神に会ったとか？？」

え・・・何で知ってんの？？家には誰もいなかったし・・・

「なんでわかつ・・・そ・・・そんなことあるはずないじゃん・・・

」

「やっぱお前 嘘つけないんだな」

へ？？もう意味わかんないよ・・・

「お前には女神が見えるんだろ」

？？まだ一人しか見たことないもん！

「まだ一人しか・・・皆みえるんじゃないの??」

また口がすべった・・・

「皆みえるわけじゃねえよ」

「何でそういう事してんのよ」

ああ言っちゃった・・・

「俺は小さいときから神や女神が見えるから」

第三話 零の秘密

「小さいころから神や女神を見ている!??」

なにを言ってるんだ・・・実際に女神とか神とか・・・まあ見ちゃったから信じるしかないか

「どうして零は神とか女神とか見れるの?」

「俺は普通の人間じゃないから」

はあ????普通の人間じゃない???だったらなんだって言うんだよ

「どんなふうに普通じゃないの??」

「まあ簡単に言うと天界で生まれたから」

天界で生まれた?ただそれだけで神や女神が見れるのか!??

「俺は天界住人のアイリスと人間界の人間の間から生まれてきたんだ!」

アイリス??なんだそりや??

「アイリスって??」

「アイリスは虹の女神だ」

虹??そつえば零と出会ってから毎日のように晴れている

・
しかも雨が降ったわけでもないのに虹が毎日のように出ている・

「じゃあ最近毎日のように晴れて虹が出ているのは、そのせいなの！？」

「まあそうだけど・・・ていうか一時間目の体育ってさぼっていいの??」

「あつ!!忘れてた!!」

こうしてこの話は終わりになり零の秘密も少し分かったので体育の用意をはじめた

第四話 女神について!??

「ねえねえなんで遅れたの??」

急いで体育着にきがえて校庭に出た私にむかって静川結花が言った

「ハアハアいろいろ・・・あつたの」

走ってきたので息があらい・・・

「いろいろって何??」

女神を見たなんて言っても信じないよな・・・

「寝坊したの!!」

さあ初めて嘘ついたよお結花・・・ゴメン・・・

「そうなんだ・・・って嘘ついてるでしょ顔にでてる!!」

「なんでわかつ・・・嘘なんかついてないもん・・・」

「やっぱり、かなっちは嘘がつけないんだ」

「うう・・・」

「いいよ、かなっちが嫌なら聞かない・・・」

涙目になった私にむかって結花は優しい笑みをむけて言った

「ゴメン・・・」

「いいよ気にしないから」

結花は小学校のころから優しかった・・・私があんなことになってもいつも見方でいてくれた・・・

それから昼休みになった・・・

「朝の話は秘密だからな!!」

後ろから声がした・・・零だ!!

「朝ってあの女神の話??」

「それいがいなんかあつたか??」

そんな事いわれても・・・

「放課後にその話の続き話したいから残れよ」

えっさっきので終わりじゃないのおお

「う・・・うん、わかった」

放課後・・・

「よし誰もいないな・・・」

零は教室に二人しかいないのを確かめて言った

「なんでそんなに警戒してるの??」

「冥界のやつが見てたり聞いてたらヤバいから・・・」

冥界・・・そういえば冥界についてはなんも聞いてないな・・・

「よし!!・・・じゃあ神と女神についての話からするか・・・」

「うん・・・」

「まず、神と女神は愛の力が源なんだよ・・・」

愛の力!??

「なんで私には女神が見えたの??」

「おまえに好きな人でもできたからじゃないのか??」

好きな人・・・零・・・ちがうちがう

ピンポンパンポンみなさん帰りましょう

「あつ明日ね・・・」

はぁなんでこんなタイミングに・・・

第五話 奏の秘密????

やばい、やばい、やばい何でこんなタイミングであんな事を思い出したの……

私は廊下を走っていると結花がすれ違った……

「かなつち??? どうしたの?????」

……結花ゴメンもう終わったことなのに思い出すと涙が止まらないんだよ……

「結花……こないで……」

私の声は廊下に響きわたった……

学校を出るとさっきまで教室にいた零がいた

「どうしたんだ? さっきまで泣いてなかったのに」

「か……関係ないでしょ!」

「幼稚園のときのか??」

!! なんでこいつがその事をしってるの!??

「そ……そうだよ……」

もうしかたないな……

「ちょっと昔の事を思い出して泣いてただけだから・・・そこ
てよー!!」

「ヤダね・・・」

「な・・・どくのもできないのー!!」

「まだ話は終わってない・・・」

「そ・・・そんな理由で・・・」

「その幼稚園のときの事と関係があるんだよー!!!!」

「はあ??何言ってるの??」

私は泣きながらも話す・・・

「いじめられてたんだろー!!結花ってやつに・・・」

まっすぐに言わないでよ・・・

「あのときも今も結花は変わってない・・・」

「ど・・・どういこと?」

私は泣くのを我慢しながらも声はふるえていた

「あいつのなかには悪魔・・・お前のなかには女神がいるんだよ・・・」

第六話 あらたな不思議？

零にあんな事を言われたが嘘だと思い零をおして走り帰った

家 5時15分

「う・・・うう・・・」

私はあの事（いじめられてた事）を思い出すと自分が止められない

ピンポン

今日は留守のふりをしようと思ったが何回もなつてうるさいのでしかたなく出ることにした

ピンポン ピンポン ピンポン・・・

私はドアを開けたそこには結花が立ってた

「なんかあったの?? かなつち?? 男子になんか言われた??」

結花は私のことを見ながら言った

「ゴメンちよつとね・・・」

私は作り笑顔でニコッと笑った

「そ・・・そう・・・」

結花は最後にこう言って帰った

しばらくするとまた・・・

ピンポン・・・

さすがにもう泣きおわったので出た

「よっ、さっき結花きただろ」

零だった、こいつは不良男子と言われ友達があんまりいないやつだ

「そうだけど何??」

「いやぁチャイム鳴らそうしたら結花がきてさぁ・・・」

「きて?どうしたの??」

「・・・ちよつと待て・・・」

零はそいつって勝手に家にあがった

「ちょ・・・何勝手にあがってんのよ」

「いや、この家に魔法陣を使ったあとがかすかだけどあるから・・・」

そついうと零は何か呪文のように何かを言っている

「なんていつてるの??」

そう言ったが零は無視する

「・・・」

怒りようがない逆に言えば啞然していた零の周りには赤い何か
ポツと出ている・・・

「結界か・・・」

結界って何??あのアニメとかであるシールドみたいなの??

「この家や、奏が普段つかってる物すべてに結界がはってある・・・」

何を言ってるの・・・誰がはったっていうの???

「だ・・・誰がはったの??」

私はよくわからないがなんとなく質問してみた

「わからない・・・でもかなり強い魔術だ何年ももたない術なのに
10年はもってる・・・」

魔術!??10年??さっぱりわからない

「奏の家族の写真ってあるか??」

「え・・・あ・・・うん、あるよ」

お母さんはだいぶまえに死んでお父さんは仕事で大変だった

「これでいい???だいぶ前の写真だ」

零にそれを見せると零はびっくりしているようだ

「どうしたの??」

「こ・・・これはカオス殿!??」

「カオスって誰??お母さんは天川未来あまかわみくだよ」

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ・・・」

第七話 裏切りと真実

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ・・・」

私は零が言ってる意味がよく分からなかった

「よく分かんない・・・くわしく説明して!!」

「うゝんくわしくって奏のお母さん《カオス》がセカイの始まりってことかな・・・」

お母さんがセカイの始まり??

「まあそのうち分かるから・・・そうだ鏡・・・鏡」

「なんで鏡さがしてるの？」

「あつあつた この鏡に奏の顔をうつして・・・」

「またお主か・・・まあとりついてしまったからしかたがあるまい」

鏡にうつった私が言うつていうか顔とかちよつとちがう

「零・・・もしかして私にいる女神って・・・」

「そう・・・この方はアポロンって言って音楽 予言 弓矢 牧畜の神だ」

疲れて幻を見ていると思っていたこいつが女神だったとは・・・

「でもなんで私なんかに・・・」

「しらねーよ そんなの遺伝子的にじゃないか？」

「お主らラブラブのどこすまぬがここから逃げたほうがいいのでは
??」

??何を言ってるんだ??

「いくぞ奏・・・」

そういうと零は私の手をグッとにぎって、外へ出て学校のほうへ
走る

「零どうしたの??なんでアポロンが言ったことで逃げてるの嘘か
もしれないじゃん」

零の手が温かい・・・

「嘘じゃないかもしれないぞアポロンは予言の神でもあるのだから・
・・・」

「それは分かったから手 はなしてよ・・・」

私は顔を真っ赤にしながらあわてて言った

「俺の足の速さについてこれるならいいけどな」

そういうと零は手をはなす私は走るのをやめそうになったけど頑

張って走る

「学校だったら大丈夫だろ」

そついうと見覚えがない学校??のなかに入っていた

「ま・・・待ってよ」

私は全力で走る零は階段をかけあがり3-Aの教室に入っていた

「な・・・なんでこんなところに逃げたの・・・」

「なんでって・・・ここは・・・」

零は言葉を中途半端にしながら真剣な目になった

「ミツケタ」

かすかに聞こえたロボットかのような感情のない声

「でてこいよ 悪魔」

零が教室中いや学校全体に響くくらいの声で言った

「悪魔って・・・」

「冥界のいや・・・地獄の住人じゃ」

私が片手に持っていた鏡にうつるアポロンが言う

「敵2人・・・女・・・女神いりと神と人間まぎりの男・・・」

今度は女の声がした・・・聞いたことがある声

「敵は1人か・・・」

零が言った

「なんで・・・敵は2人じゃないの??」

「いや、敵は1人じゃ悪魔は人間にとりつく」

「そう・・・もし悪魔が2人だったら悪魔がもう復活している事になる」

私の質問にアポロンと零が答えてくれた

「メガミ・・・カミ・・・コロス」

どこからか聞こえてくる声・・・

「ユカ・・・トモダチヲコロスケドイイカ」

「ええいいわよはつきり言えば偽友だから・・・」

暗闇からゆつくりと出てくる1人の女

「ゆ・・・結花!??」

「ああ奏か・・・ゴメン前から嫌いだったんだ」

結花は満面の笑顔で言った

「う・・・嘘だよ・・・」

「嘘じゃねえよ」

零が大きな声で言った

「う・・・嘘だよ・・・ね・・・」

私の目には涙が・・・

「さっき俺がお前の家いったときに結花が舌打ちしてたしな・・・」

零が私を説得するように言う

「そ・・・そんな」

「さっさとこんな人生を終わらせたいならこっちに来てすぐらくにしてあげるから」

結花はさっきから満面の笑顔だ・・・

「じゃ・・・じゃ幼稚園のときの気持ちは嘘だったの??」

「そう何年我慢してたと思ってんの?? まあいいわさっさとはじめましよ」

「はじめるってなにを・・・」

私はもう泣いてなかっただって零やアポロンがそばにいてくれたから

「戦争を・・・戦争を始めましょう」

結花は不気味な笑い声とともに言い暗闇に消えていった

「奏・・・今からは戦いがはじまる・・・アポロンは全く力が戻ってない・・・今から落としていいか」

零は真剣な顔で言った

「落とすって何を」

「とくかく目をつぶって・・・」

私が目をつぶると私の唇にはやわらかいなにかがあたっている

びつくりして目を開けると零の唇だった

「なんじゃ無理くりじゃのう零たしかに奏の好きな者はお主じゃが・・・」

「いいじゃないですか俺もあいつのこと好きなんだから」

「まあいい話はあとじゃ」

アポロン
私の頭には天使の輪のようなものがあつた

「おおこんなキス一回でこんなに力が戻るとはお主は天才じゃなあ」

「うるさいな・・・ゼスと呼べゼスと・・・」

「ほうお主はゼウス殿の子ではないか!？」

「そつだ・・・」

「あら神々どうしのお話中ですみませんがもうはじめていいかしら?」

「ああ臨むところだ!!」

第八話 大人な遊びしませんか？

アポロン

今わらわは学校とやらにおる・・・ここは戦場じゃ

「女神と神もどき・・・ふふ・・・すぐ楽にしてあげますわ」

あの結花とやらは不気味な笑顔で不気味な笑い声をたてながら言
った

「ここはダメじゃ・・・校庭まで逃げないと死ぬぞ」

わらわの予言では学校全部破壊すると出た

「わらわは東門からゼスは西門から・・・」

わらわとゼスは同時に走り出しふたてに分かれた

「クツやはりこちらにも敵の手が・・・」

わらわの東校舎のほうにはトゲのトラップが多く仕込んであった

「ふふ・・・校舎から出るまえには殺せそう　ふ・・・フハハハハハ
ハハハハハハハハ」

どこからか聞こえてくる悪魔の声は不気味さを増している

「わらわはこんな簡単なトラップでは死なないぞ・・・」

わらわの声も学校中に響きわたり

「おう！！こんなところで死ねっか」

ゼスからの返事が聞こえた

「そろそろウォーミングアップは終了じゃいつも通りいこうではないかお主もそうではないかゼス」

わらわは術を使って弓矢を出しトラップを一つ一つ確実に射る

「そうだな・・・負けてらんねえー」

ゼスのほうからは魔法陣のヒカリが見えた

「クツやはり本気で叩かないと死にそうにもなんなんわ・・・おい
っあれで一発で殺せ」

「フハハハハ オヌシモホンキデイクノジャナ」

小さい声だったけどかすかに聞こえたたぶん屋上あたりにいる・・・

「出口じゃ・・・」

大きな魔術の気配を感じた・・・わらわはゆっくり外へ出た

「ヤアヒサシブリダナ アポロンオヌシハマツタクカワツテナイ」

わらわの首にはナイフ……目の前には人間の姿だが声的に悪魔
 だろう私があつたことある悪魔

「クミか……」

クミとはずっと昔わらの力が完全だったときに戦った悪魔

「フハハハアノトキオヌシニマケテカラワラハカワツタゾマジ
ユツモツヨクナツタシナ」

よく考えるとクミも完全に復活してないように思える

「じゃあ殺してみたらニンゲンを」

[illegible]

不気味な笑い声をたてながらクミはナイフを首めがけて動かし

「ダメ人を殺しちゃ……絶対ダメ」

そのとき1人の女の声が聞こえた・・・そう悪魔は悪魔でもこの人間とつながってるそして感情も・・・

「ナ．．ジャマヲスルナルナ．．ウガアウワアアアアア
アアアアアアアアアアアアア」

激しい叫び声……

「す……すみませんゴメンなさい」

「お主は謝るな．．．つらい思いをしてきたんだろ．．．」

そういつてわらわは瑠奈と言う女をだいた女の目からは涙．．．

「ありがとうございます．．．ありがとうございます」

それから女はどこかへ帰っていった

奏

「なんであるときあの子が辛い思いをしてきたのが分かったの？
」

私は鏡にうつった私に聞いた
アポロン

「あんな女神や神は愛の力で復活するが悪魔は不幸の力で復活する
のじゃ！！」

「不幸の力．．．それなら分かるか．．．」

ゼス
零

俺は痛みを我慢しながら魔法陣を書いていた

「ハアハアハアハアハア」

俺の腕や膝．．．いろんなところから血が大量に出ている．．．

「フフ所詮人間ねこっちは殺せそう」

廊下に不気味な声が響きまるで洗脳状態だ

「で・・・できた」

俺が書いていた魔法陣はテレポートができる魔法陣だった

「時空の神よ 俺をG市N学校の校庭へ・・・」

魔法陣がヒカリだし気がつく到校庭にきていた・・・そこには女が1人たっていた

「どうしたの??大丈夫??」

血は止まらずダラダラと流れている・・・

「さっそく悪魔入り女か・・・」

「ヨクワカタナ・・・マアアツチトチガツテカンタンニコロセソウダナ」

あっちはうまくいったのか・・・

「魔法陣種第24番機・・・抹殺の目玉・・・悪魔・・・死ね」

俺の目の前にはグロテスクな光景が広がっている

「まあ女さえ殺さなければいいのだからこんなんでいいだろ」

奏

「零???大丈夫?????」

私が校庭に行くと血のたまりがあつた零に聞くと

「俺の血だ」

という・・・そのわりにはけがした場所が少ないし、出血も止まっている

「そうなんだ・・・」

「ちつやられたか・・・わたくしが手をくだすのはもう少し先にしましょう」

私達が屋上を見ると黒い翼のカラス達が集まり不気味だった

次の日・・・

私は結花のことがあり学校に行きたくなかったが零もいるので行ってみた

キンコーンカンコーン

加藤先生がドアから入ってくる・・・最初に口にした言葉それは

「結花さんは転校しました」

教室がざわめきで包まれた あとで先生に聞いてみた

「どこへ転校したのですか？」

先生は困ったようにして行った

「それがわかんないんだよね・・・家は売り出されて、今考えると家族の顔見たことないのよね・・・」

「そうですか・・・」

私がそういうと先生は何か思い出した口調で言った

「そついえば下駄箱にね入ってたの!!」

「何が入ってたんですか????」

「カラスの羽よ・・・しかも何枚もよ!!」

カラスの羽・・・もしあの出来事のあとに学校に来たのなら・・・

そのときだった・・・放送のチャイム

「ピンポンパンポン この学校は私達が支配した!!」

第九話 あらたな敵!??

「ピンポンパンポン この学校は私達が支配した!」

学校中はザワザワと荒れている・・・

「どうせ演劇部か放送部の練習だろ!」

などと放送が嘘だと言ってる人がほとんどだった そのときだった教室のドアが開いた

「始めましてー黒い鳥ブラックバードの黒羽です ここに女神と神もどきっているう??」

ブラックバード・・・黒い鳥・・・カラス・・・結花!!!!!

「あつれーゆかりんの情報だとココなんだけどなー出てこいよクラス的全員を殺してもいいんだぜ」

・
黒羽いうやつはたぶんだが結花と同じグループの者なのだろう・

「はあ?そんなやついるはずねえだろ!」

クラスの男子はそういつている

「危機感がないやつらね・・・」

そついうと黒羽は男子1人を捕まえ首に手を近づける男子は零だ

った

「魔法陣種第32番機・・・破壊の渦・・・」

ぼそりと零がつぶやいた黒羽の周りを囲むように魔法陣が作られていく・・・

「フハツ自分から出てくるとは光栄だね・・・魔術種第21番機・・・狂歯車・・・」

黒羽がそう言った瞬間・・・魔法陣がパズルが狂ったかのように崩れていった

「チツ・・・」

零は舌打ちをして黒羽から離れた

「アポロン・・・お前もほうが力あるだろ」

零はそう行って私からアポロンに変われと合図する

アポロン

「なんじゃゼスわらわに協力せよと・・・まあ良いがこの服は動きづらいぞ」

わらわはジーパンとならを指さしながら言った

「しらねーよ　ちょっとこいつらを倒せばいいだけなんだから」

「しかたない天界術式第44番・・・罪と正義の分かれ目・・・」

わらわの手には天術のかたまりでできた刀で黒羽にたちむかった

「魔法陣種第25番機・・・神の鉄槌・・・」

ゼスはギロチンの刃でできた刀でたちむかう

「ふふっやっとな人でましたわね・・・死になさい」

黒羽がそう言った瞬間に教室からはツルのようなものが出てきた

「なっクラスのみんなを殺す気が!」

零はクラスのみんながいるのに気づいていった

「フハハハハこいつらは道具として使わせてもらう」

そついうとツルのようなものは皆めがけて動いてくる

「キャーーーーー」

ツルは皆の体の中心をつらぬいていた皆の体からは大量の血が・

奏

「もうやめてこんな悲しい思いをするのは私で十分」

私はアポロンから自分の意識を奪い取り必死に叫んだ

「フフ言ったわね　じゃあ遠慮なく」

そう言つとツルのすべてが私の体めがけて動く

「奏!!」

零だった零は刀を使いツルを確実に切っていく

「カミトメガミ・・・コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

クラスの皆が私のところに近づいてくる

「やめてやめてやめてやめて嫌嫌嫌嫌もう昔みたいに1人はヤダヤダヤダヤダ」

アポロン

「お主ら・・・友達をこんな目にあわせようと・・・ただですむと思うな・・・天界術式第1番・・・幸運と不運の境・・・」

クラスの者はみなバタバタと倒れていく・・・別に殺したわけではない眠らしたのだ

「チッやはり人間は使えない・・・この学校ごと死で埋めてやる」

ツルはどこかへ引つ込み黒羽はどこかへ行つた

「ここは離れよう・・・」

体力を大幅に消費したわらわには今予知は使えない・・・

「だが学校の人々が・・・」

ゼスはそう言つて反対意見を出した

「何を言つておる・・・もし神と女神がそれなりに力を取り戻せれば簡単な事ではないか」

わらわはこう言い残し奏へ変わった

奏

「え・・・あ・・・」

私はいきなりアポロンに言われたのでどうすればいいのかとまどつていた

「あ・・・あのさ前から好きだった・・・」

「え・・・い・・・今・・・」

「お前のことが好きなんだよー!!」

私は顔が赤くなった・・・好きな人に告白されたのは初めてだ・・・

「あのおー良いムードのところすみませんが私・・・協力しますよ・・・」

そこには腰のあたりまで伸びてる茶色の髪の毛でいかにもモテそうな女の子がたっていた

「わ・・・私・・・水谷葵みずたにあおいって言います・・・あの・・・その女神が入ってます・・・」

「め・・・女神入り!!」

私と零は声をあわせて言った・・・この学校にまだ女神入りがい
るとは思っていなかった

「まあメンバーが1人増えたしさつさとみんな外に・・・」

「はい!!」

零が言い終わるまえに葵さんは返事をした・・・なんか不思議な
子・・・

「ここに女神と神の力あり・・・この人々の愛でみなを助けたまえ・・・」

そういつて目を開けると私達は校庭にいた　もちろんクラスの皆
もだ

ドッカーン

それは校庭に出てすぐのことだった激しい爆発音がし学校が崩壊していく

次の日

学校から電話があった学校は新しく建て学校ができるまで休みだという

「しばらく零と会えないのか・・・」

さらに零の告白のせいかアポロンには翼がはえた

プルルルル

ケータイの呼び出し音になった だれだろう

「誰で・・・」

「た・・・助けて」

その声は葵さん以外誰の声でもなかった

第十話 奏が・・・

「た・・・助けて」

「な・・・どうしたの・・・」

「M地区の旧校舎で・・・」

そこで電話は切れた私は夜で雪が降ってるのを無視してM地区の旧校舎にむかった

「葵さん・・・いますか??」

旧校舎は昔、神道高校だったらしいとても暗く怖いしかも迷路のように道がたくさんあった

「きゃーーーーー」

葵さんの叫び声が聞こえた私は迷路のような廊下を走り一つの教室のまえで止まる

「オカルト研究部・・・」

私はゆっくり教室のドアを開けた・・・だがそこには人間の影なんてどこにもなかった

「葵さん？」

私はゆっくり教室に入った

「遊びませんか？」

後ろから声がした振り返ってみてみるとそこには骸骨がたってた

「椅子取りゲーム・・・やらない？」

すごく怖かった・・・

「は・・・はい」

私は思わずイエスと言ってしまった

「ルールはこうだ勝った人の言うことをなんでも聞く・・・」

勝った人の言うことをなんでも・・・

「そうなんでも・・・な・ん・で・も」

骸骨は私の思ってることを完璧にあてた

「わかった・・・やる」

地獄かのような椅子取りゲームがはじまった・・・たくさんの人形達を相手にやるのだから

「ククク」

不気味な笑い声をたてながら骸骨が勝ってしまった

「じゃあ命令するよボクの仲間になれ!!」

「骸骨の仲間・・・」

考えただけでゾツとした

「ちがうちがうボクはブラックバードだよ」

「ブ・・・ブラックバード・・・」

「そうブラックバード・・・フフ君が賭けにのったんだ」

「嫌だ嫌だ仲間を裏切りたくない」

「約束を破るのかい・・・じゃあこいつを捕まえる!!」

骸骨がそう言う私の周りを人形が囲んだ

「われわれは天界を壊すことではない・・・新世界をつくるのだよ
新世界を!!」

骸骨のその言葉を最後に私は気を失った

ここはどこ・・・

「おっお目覚めかい？」

周りを見るとお城のようにきれいな部屋だ・・・王の席のような
ところには骸骨が座ってる

「……はい」

「フフよくぞ聞いてくれたここはブラックバードの秘密基地だ!!」

「秘密基地なのにこんなでつかいって・・・」

「秘密基地だよ……だって本部のほうがでかいんだから」

．．．今思ったんだが動けない．．．足も手にも何もされてないのに．．．

「ああそれは魔術だよ」

「ま・・・魔術」

「あ……葵さんは」

「あああれは偽者……すごいだろ魔術というのは」

骸骨は不気味な笑いをたてながら言った

「お前はこの組織のなんなの……」

私は質問をしてみた

[illegible]

ちよつと不気味だったいつもよりも……

「おいこいつを洗脳室へ連れてけ」

骸骨は私を指さしていった

第十一話 奏の危機

「おいこいつを洗脳室へ連れてけ」

骸骨は私を指さしていった

「アポロン・・・」

私が読んでも何も反応がない・・・

「あああの女神がお前から出させてどっかいったぞ」

骸骨が答えた・・・私は今一人・・・

「ついたぞ」

そこは鏡がたくさん置いてある不思議な部屋だった

「キャーーーーー－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて」

零

「はあああああああああああああああつながんねえ」

俺は奏に電話を50回以上かけてるが全部留守と言う

「なにしてんだ奏・・・」

俺が電話を壊しそうになったとき窓が鳴った

ドンドン

窓を開けると巫女のような人がういていた

「ゼス・・・奏が・・・」

「アポロンか!」

俺はアポロンから奏の状況を聞いた

「奏がブラックバードに!???嘘だろ・・・なんで奏を守んなかった」

「あそこに入るのは私には無理・・・全面的に魔術で入ったら私はもうここにはいない・・・」

「まあいいとにかくそこにつれてけ!」

俺はそいつってコートを着て外へ出た

「どっちだよ」

「あっち・・・G公園のところ」

「よし行くぞ!」

第十二話 洗脳少女VS不良男子

零

俺がブラックバードの秘密基地？につくとそこには人間の影が

「きたか・・・フフ・・・」

ブツブツと不気味に何か言っている女性だった

「奏はどこだ!!」

「奏？あああの子・・・フフ大事な人を助けに来たってわけ・・・でももう遅いよ」

女は不気味に満面の笑みをうかべながら言った

「ここを通してもらっ・・・魔法陣種第22番機・・・ココロの針・・・」

「フフそれはわたくしに戦えと・・・そう考えていいのか？」

「ああ・・・」

女の顔からも俺の顔からも笑みが消えた

「だがわたくしに勝ったとしてもお前らはここに入れないあの子が自分から出てこないかぎり会えないわね」

そうか魔術度がおおすぎて入れないのか・・・俺はケータイを取り出し1人の女に電話をした

「今すぐG公園に來い・・・」

「え・・・あ・・・どうしたんですか？零さん」

「緊急事態だ・・・奏が捕まった」

「奏さんが・・・はい！！いますぐ行きます！！！！」

その言葉と同時にドアが開く音がした奏だ・・・

「かな・・・」

「ダメレ」

その言葉には感情がなく奏らしくない口調だと思った

「ココデオマエヲコロス・・・天魔術式第99番機・・・死神と女神の微笑み」

「奏・・・チツ・・・」

俺は舌打ちをしあいつが来るまで奏を殺さず耐えるという決断をした

「モウナニモカモイラナイ・・・」

奏はボソツとそういうと俺のそうへ走ってくる

「シネ・・・デキソコナイノカミ・・・」

「魔法陣種第14番機・・・無限の盾・・・」
インヒイニットシールド

これではらくは耐えられるだろう・・・俺の周りには盾がはられそこに奏が突っ込んできた

「コロスコロスコロスコロスコロスコロス」

「クッ」

強い・・・盾でガードしているがそれでも痛みが伝わってくる・・・あの短時間にどんな事が・・・

「プシュケーサマノケイカクラジャマサセナイ」

プシュケー？計画？？いろいろ分からないことばかりだ・・・そんな事を考えてる間にも無限の盾も崩壊しはじめた

「そろそろ壊れるか・・・」

そう心でも思ったときに・・・

「あの遅れてすみません！！」

そう俺が読んだ人物とは葵だった

「神術式第28番機・・・月旅行・・・」
ムーントリップ

葵のその言葉と同時に満月の光が秘密基地や俺らを照らした

「月の世界へ・・・」

その言葉と同時に奏が倒れた

「大丈夫か？奏」

「大丈夫ですよ気を失わせただけですから」

葵は優しい笑顔で言った

「魔法陣種第5番機 時空の歪み・・・」

この術は結花と戦ったときに使ったものだ

「時空の女神よ 俺らを俺の家へ・・・」

俺と葵そして奏を魔法陣が包みしばらくすると俺の部屋に

「ハナセココハドコダ」

奏が起きたのでやばい行動をされないように柱に鎖で縛りつけといた

奏

目が覚めると誰かの部屋にいた・・・1人の男が視界に入るプシ
ユケー様の邪魔をする男だ

「ハナセココハドコダ」

そういえばなんでプシケ様の命令に従っているのだろう・・・まるで束縛人形だな・・・この男はどこかなつかしい感じがする・・・一緒にいると落ち着く・・・それでも私は縛られているあの人のせいで・・・まるで鎖で縛られ何もかも決められ命令ど通りに生きていくのだろうか・・・そんなのヤダでも逆らう勇気がない逆らったら昔みたいにな・・・昔？昔何があったわけ・・・そういえば昔の記憶がない・・・

そんなことを考えながらも私は暴れていた・・・もう何もかもわからない

気づくと私は柱に鎖で縛られ動けなかった

ついさっきまで戦っていたはずの男は私にむけて優しく微笑んでいる・・・なんなんだこの男は・・・誰なんだ・・・思い出せない・・・思い出したい・・・こんな事ホントはヤダ・・・向けだしたい・・・こんな暗い差別ばかりの世界を・・・そうだプシケはそう私に言っただ・・・結局ただ道具としてしか使われてない・・・どうせだったら・・・もう・・・もう・・・

「奏・・・俺を覚えてるか？」

いきなり男が話しかけてきた

「知るか・・・」

何か私の言葉には感情という何かを生み出すことができた気がした

「そうか・・・俺は零・・・柳澤零だ・・・」

「零・・・なんかつかしい・・・」

どこか聞いたことがある・・・私にとって何か大切な・・・大切な人どうしてかはわからない・・・でもとにかく大切・・・大事・・・な人・・・

第十三話 復活

どこか聞いたことがある・・・私にとって何か大切な・・・大切な人どうしてかはわからない・・・でもとにかく大切・・・大事・・・な人・・・

「チツそろそろ記憶が戻るか・・・」

どこからか聞こえる小さな声・・・聞き覚えがあるが分からない思い出したくないそんな気がした

ドッカーーーン

外から大きな音がした零という少年が窓から音のするほうを見ると舌打ちをした

「こんなときに来るんじゃないやねえよ」

誰がきたのだろう・・・分からないがけっこうやっかいな人なのだろう

「奏・・・一緒に戦ってくれるか？」

ぼそりと零が言った・・・戦うってさっきまで敵のように・・・でもなんか敵って感じじゃなかった・・・信じていいのかな・・・

「裏切らない？・・・信じていい？・・・」

私は零なら何か信じてもいいと思った裏切らないって思った・・・

「俺はお前を信じる・・・決めるのはお前だ・・・」

私の目からは自然と涙が・・・涙が流れながらも私はコクンとうなずいた

「信じる・・・まだ何も思い出せないけど・・・でも・・・」

私は泣きすぎてこれ以上何も言えなかった零はそんな私を見ながら鎖をほどいて私を解放してくれた

「お前はお前らしくいればいいんだよ・・・俺がお前を助けるから・・・」

零は私を抱きそう言ってくれた

「行こう・・・」

そついうと私の手をつかみ外へ出た

「出てこいよ・・・いるんだろ結花!!」

結花・・・結花・・・何かとても嫌な思い出が混ざって思い出そうと思ったが思い出せなかった

「あれえもうばれた？まあいつか」

暗闇から1人の少女が現れた

「魔法陣種第32番機・・・破壊の渦」

結花をかこむように魔法陣が作られていく

「フフ・・・フハハハハハハこんなレベルの低い技でブラックバードに勝てると思ってるの」

不気味な笑い声・・・嫌！思い出したくない・・・そんな事を思いながらも昔の出来事や結花の裏切り行為が頭のなかにインプットされていく

「結花・・・なんで・・・なんで・・・キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

そのまま私は意識を失った

零

「結花・・・なんで・・・なんで・・・キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

奏はそのまま意識がなくなり・・・天界術の暴走が起こったアポロンが奏のなかに入ろうとしたときに起こったアクシデントだ

「奏！！魔法陣種第76番機・・・宝物の探し旅・・・俺の大切なものは・・・」

奏！お前だ・・・

「フフなんかいい調子魔術式第29番機・・・悪ノ目」

結花の悪ノ目とは前に聞いたことがある・・・人の思い出したくない辛い過去を思い出させる技だ

「結花・・・やめろ！！！」

結花は奏のほうを見て不気味な笑顔を作っている

「フハハハハハハハハハハいい景色」

俺は結花の視覚に入り自分が技の対象になった

「チッ邪魔だ」

ぼそりと言われたがそんなのは無視した思い出す辛い過去・・・信じてた人に裏切られた辛い記憶・・・でも奏に比べればそう思った

「魔法陣種第22番機・・・ココロの針」

俺が今いやなのは奏を失うこと・・・奏を助けるには・・・

「針よ・・・結花・・・静川結花を倒してください」

針は結花のほうにむかっていく結花は針の速さに追いつかず体にささる

「フハハハお前は人を殺した・・・人を・・・それはお前にとって忘れられないことだ！！！」

結花はそんなことを言ったが実際は幻覚だ人を殺してなどいない

幻覚の中で殺したのだから・・・だが現実では結花は気を失っただけである

「奏! !」

奏のほうを見ると奏の目からは涙が・・・そう宝物の探し旅は大切な人を助けたいという願いが2分の1の可能性でおこるものである

「れ・・・零???ゴメンね・・・ずっと忘れてて・・・」

「奏・・・」

俺は奏を抱っこし家のなかへ入っていった

奏

目が覚めると零に抱っこされていた

「奏・・・ありがとう」

零は私が起きたのに気づいてないみたいだった

本当は私が感謝するべきなのだが逆に感謝されたのでちょっと不思議だった

第十四話 葵が！？

「奏・・・ありがとう」

零は私が起きたのに気づいてないみたいだった

本当は私が感謝するべきなのだが逆に感謝されたのでちょっと不思議だった

再び私は眠り起きると零の部屋の零のベットにいた

「あれえ？なんでここにいるんだろう？？」

私はベットから降りようとしたら何かにあたった・・・電気をつけてみると零だった・・・

なんで一緒に寝てるんだろう？まあいいや私は再びベットに戻り寝た

次の日

私が起きると零はベットにいなかった零の部屋は二階で一階からは良い匂いがした

「ふああああ」

私はあくびをしながら一階へ行った零はキッチンで料理を作っていた

「おはよう・・・昨日はありがとう」

私は昨日の記憶がないでも零に助けられたというのは分かる

「ああおはよう」

零はフライパンで目玉焼きを作りながらいった

私は居間の椅子に座り零の家がこんな感じなんだと思いながら壁紙を見たりしていた

昨日どんなことがあったのだろう・・・そんな疑問がある・・・でもそんな大切な事でもない

「できたぞぉ」

零はちよつと眠そうな声で言った

「はい」

私はダイニングルームに移動し零の手料理に啞然したご飯、自玉焼き、サラダと水・・・どんだけバランスのよい食事をしているのだろう

「いただきます」

零と私は声を合わせ言い食べ始めた・・・零ってこんなに料理うまかったんだ・・・そんなことを思った

「ごちそうさまでした」

私は皿を片付けお礼としてお皿洗いをした

「零って1人暮らしなの??」

「ああ・・・お母さんは女神だから天界にいるし、お父さんは病気で死んだ」

「なんかゴメン・・・」

そっか零は人間と天界の住人の間から生まれたんだもんね・・・

「いや謝んなくても・・・」

「えっあつゴメン」

つい謝ってしまった

「だから謝んなくてもいいから・・・」

零

ピンポン

家のチャイムが鳴った

「?誰だ??」

俺は不思議そうな顔をしながら出た

「あのえつと葵ですが奏さん元気ですか？」

葵か・・・

「ああ葵か・・・奏なら元気だよ」

俺はそう言いながら奏を連れてきた

「よかった・・・」

葵はなんか変な反応をしている・・・

「大丈夫か？顔を赤くして？」

俺は葵のおでこに手をあて熱がないのを確認した

「熱はないな」

ただそう言っただけなのだが葵は顔を真っ赤にしてこちらを見られ奏はムスツとした表情を見せた

「俺なんかしたか？」

「した」

奏と葵は声を合わせ言い、奏の声は怒った感じで葵の声はあわあわしている声だった・・・

しばらく静かになり葵が口を開いた

「零さん・・・あの明日・・・学校で言いたいことがあるので・・・」

葵はそう言い残し帰って行った

「奏？なんでそんなにムスツとしてるんだ？」

俺が聞くと・・・

「恋愛事情！！」

どういう意味だ？さっぱり分からなかった・・・別に葵のことはどうも思っていないぞ？

次の日

キンコーンカンコーン

奏と葵の言葉を不思議に思いながらも授業をうけていた

朝、学校に登校してきたら下駄箱に入っていた葵からの手紙「放課後、学校裏の迷いの森の入り口に来てください」と書いてあったのを確認した

放課後

俺は迷いの森の入り口に行くと葵がいた

「待ったか？」

「え・・・ううん全然・・・」

葵はちよつと慌て気味だった

「あのえつとちよつと散歩しない？」

葵はそう言つて俺の手をつかんだが、なぜか顔を赤くし手をはなした

奏

私は葵がきつと零になにかするだろうと疑い零や葵に気づかれなようにこっそりついてきた

「迷いの森の入り口？」

葵のあとをついていくとついた場所だ

零がきた・・・なんか話してる・・・あつ手をつないだ！！あつはなした・・・

葵

どうしよう・・・2人つきりにしたけど・・・もっと緊張してきた・・・よし！！！！

「零さん・・・あの・・・私、零さんの事が好きです！……！」

あわわわあ言っちゃったよぉ・・・

「ちよつと何やってんのよ！」

私はびっくりして声のするほうを向いた奏さんだ

「零は・・・零は私の・・・私の・・・」

奏さんも慌ててるみたいだ

「2人ともどうしたんだ？」

零さんは何が何だかさっぱりわからず質問してきた

「零・・・私と葵・・・ドッチをとる・・・？」

奏さんが真剣な目で私のほうを見る・・・

「わ・・・私も聞きたいです・・・」

「お・・・俺は・・・」

零

「お・・・俺は・・・」

奏と言おうとしたが強い魔力を感じたので言えなかった

「敵だ!!」

「じゃあ戦い終わったら・・・答えてね・・・」

奏と葵は素晴らしい女神に変わった

「フフフフフフ今日は楽しい遊びになりそう」

上を向くと黒羽がいた

第十五話 新しい仲間は??

「フフフフフフ今日は楽しい遊びになりそう」

上を向くと黒羽がいた

奏

なんでこんなときに敵がくるのーーーーそんな事を考えながら
も私はアポロンにかわった

アルテミス

葵と奏殿女神の意識になり、戦いがはじまった

あと私の名前はアルテミス・・・言い忘れていた・・・

「フフフフ今回は森全体を魔術で囲んだお前達の力は弱まった」

黒羽の言葉にブチッとなりつい術が

「神術式第23番機・・・希望の鈴」

私とアポロン殿そして零殿の周りを神術の陣が囲む

これなら少しは魔術の影響を受けない

「チツ小細工しやがって死にな」

私の周りにはトゲが多いツルが囲み逃げ場がない

「葵・・」

零殿がツルを切り私のことを助けてくれた

「さすが葵の彼氏だ……だが私はアルテミスだ」

「わりー……あと彼氏じゃない」

こんなときでも鈍感だな・・・

アポロニー

ゼスも鈍感すぎにもほどがあるぞ！！

「天界術式第85番機 神の天罰」

わらわの装備には矢と弓が増え黒羽にむけてうつてるのだが、よ
けられる

「逃げるな直接戦え！！」

「それもよいな！！フハツッフ・・フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

不気味な笑い声と共に黒羽がおりてきた

黒羽は零の家にとめることになった。ちょっと心配・・・

「ああ結局あれからなんも言ってないじゃん!!」

さっきの続きはどうなったのだろうか？零は私のことを選んでくれるのだろうか

それからすぐ私は寝た

次の日

「はじめまして！黒羽佳奈くろはなかなです」

なっ、黒羽って言うか性格だいぶちがう

「なんかちがう人みたい」

私は零にこっそり言った

「やっぱり奏のときみたいに記憶がない」

私にそう返した

「あのあんまり覚えてませんがよろしくお願いします」

どういうことだ・・・もう無関係になったのでは??

「もう無関係じゃないの？」

「あつ言い忘れです。えつと女神入りです!」

「いや、俺の家いるときに入ったみたい」

「あつありえなーーい」

私と葵さんは声をあわせいった

「零・・・くろは・・・じゃなくて佳奈さんになんかしたでしょ!」
「!」

「えっ?なんにもしてないが!」

零は鈍感だからどういふことかさっぱりわかってない

「まあとにかくよろしく!」

そついつと佳奈さんは零の手をつかんだ

第十六話 三角関係〜四角関係？

「まあとにかくよろしく！！！」

そついつと佳奈さんは零の手をつかんだ

絶対なんかしたでしょ！！じゃないと女神は入らないもん！！！！

「零・・・さっきの続き！どっちをとるの！」

私は葵を見た後に零を見ながらいった

「俺は・・・」

「あの？なんの話ですか？？？？」

佳奈さんだ、このまま話すともつとやっかいな事になる・・・

「えつとだな・・・俺が奏と葵ドツチをとるかって話で」

言っちゃったよおー

「私も仲間に入れてください！！！！」

ガアアア・・・恋敵ライバルが増えたああ！！

「別にいいんじゃない？」

零が言った

「無理、無理、無理、無理」

私と葵さんは声を合わせ言った

でも、零の気持ちは変わるかもしれない

「じゃあ自分なりに努力してクリスマスの日に言ってもらえばいいんじゃない！！！」

佳奈さんが言った。たしかにそれもそうだ

「さ・・・賛成です」

「私も賛成」

私と葵さんも賛成し、その日まで待つことになった

「昔々あるところに三人の少女と一人の少年がいました。一人は悪へ手をのばし、もう一人は善へ、もう一人は少年と幸せに暮らした・・・」

どこからか聞こえてくる不思議な物語、まるで・・・本当にあるかのような・・・

葵

次の日

「あああああどんな努力すればいいのかなあ・・・ううわかんないよお・・・そうだ!!!!!!」

私はバックに入ってるケータイを取り出した

「あの零君ですか？もし良かったら今度、ゆうえんちにいきませんか??」

「ああ抜け駆け??」

ケータイからは女の声・・・ケータイ番号もあってる

「あ・・・あのどちらさまでしょうか??」

「佳奈だよー！おはよう」

佳奈さん・・・男の人のケータイを見るのは・・・

「ていうか、なんで佳奈さんが零君のケータイに出てるのですか!!」

「そういう葵ちゃんも、なんで零さんじゃなくて零君なのお??」

うつ・・・それは努力です・・・ずっと零君を連発し言えるようにしたんです!!

「努力をしたんです!」

私はいばるように言った

「そうですか！私は零兄ちゃんと無理くり言ってもいいように交渉しましたか？」

「うう・・・」

でも・・・呼び捨ての奏さんのほうが上じゃないか？？

佳奈

「零兄ちゃん！ムフフン！葵ちゃんを追っ払いました！！」

私は零兄ちゃんに自慢したが、なぐられた

「零兄ちゃんはやめろ！あと勝手に人のケータイ見んな！！」

「零兄様のほうがよかった？？」

「やめろ！・・・零とかそういうのにしろ！！誤解をまねく言い方はやめろ」

うーん。おそるでし・・・あつ！

「じゃあ・・・ダーリン！！！！」

私は零じゃなくてダーリンに抱きつきながら言った

「お前は彼女よりも妹のほうに近いな・・・」

ムッ・・・ダメだったか

「子供じゃないもん！！料理だって」

「料理だったら美味しいのにな・・・」

予想以上にヒドイ言い方だ・・・

「子供じゃないよぉ！！！」

「はいはい」

オイオイオイオイオイオイオイオイオイひどくない
か・・・

夜・・・ベットにて

「ううどうすれば奏ちゃんをぬかして零君の彼女になれるか・・・」

うーん・・・なんなんだろう・・・この胸が苦しいっていうか痛
いって感じは・・・

奏

零は私の・・・絶対だれにも渡さない！！・・・だからアタック・
・・・アタック！！

第十七話 とりあい作戦!!!

奏

零は私の・・・絶対だれにも渡さない!!!・・・だからアタック・
・アタック!!

次の日

ピンポン 零の家にて

いないかな・・・

ガチャ・・・ あついたいた

「零・・・2人で学校にいかない??」

零は半分こまった顔で私を見る

「どうしたの??」

「いや、佳奈がな・・・」

「佳奈さんが??」

さっそく邪魔されるのぉー

「佳奈も一緒にいいか??」

「あ・・・うん！」

しょうがない・・・変に嫌って言うてもダメだろうし・・・

ピンポーン

「あの一緒に学校にいきませんか??」

ガーン葵さんまで・・・結局4人で学校へ・・・

キンコーンカンコーン

授業中なら邪魔されない・・・よね

「れ・・・零あのさ教科書、忘れたから隣で一緒に見ていい??」

「ああうん・・・」

零・・・顔アカッ！熱あるのぉ・・・ていうか近くだとシンセン
だなあ

「あのさ奏の誕生日って明日だよな？」

零がいきなり聞いてきてびっくりした・・・って明日が自分の誕生日って忘れてた・・・

「うん！そっだよ！！！！」

「そっか・・・」

零の顔は耳まで真っ赤・・・キャー！ーカッコイイ！！！！

葵

キンコーンカンコーン

「零君???一緒にお弁・・・か・・・奏さん・・・って佳奈さんも
!!!」

むううさきに手をつってましたか・・・

「あのお私も一緒に・・・」

「ヤダ!!!!」

佳奈さん・・・ヒドい・・・

「いいじゃねえか、みんなで食べようぜ!!!!」

さすがです。零君!!!!!!

「あ・・・ありがとぉーございます」

私はペコリとお辞儀をして零君の隣に・・・

「零君の隣は私!!」

佳奈さんはギュッと零にくっつく・・・が零君にたたかれた

奏さんはここは私の場所だ！って雰囲気を出している・・・無理だ・・・

しかたなく私は零君から向かえの席にすわった

「あの零君・・・私！！お弁当を作ってきたので食べてください！！！！」

「えっああ・・・」

私は零君から許可をいただいたので、バックからお弁当を出し渡した

「うおうめえー！！！！」

私は零君のその言葉を聞き、後ろを向いてガッツポーズした

零

「うおうめえー！！！！」

すごいな皆・・・っていうか弁当すごく豪華なんだけど食べるのがもったいない・・・

家にて

奏は優しくて、それでいて頭が良くて、明るくて・・・俺に未来をくれた・・・

葵は優しくて、人見知りでおだやかで・・・がんばりや・・・

佳奈は明るくて、うるさくて、妹っぽくて・・・バカ・・・

俺はベットに入った・・・

俺は今、奏が好きだがもしかしたら葵・・・佳奈・・・のどちらかを好きになるかもしれない・・・でも、全然知らない誰かかもしれない・・・でも俺は俺の未来をつくる！！！！

第十八話 奏への告白

俺は今、奏が好きだがもしかしたら葵・・・佳奈・・・のどちらかを好きになるかもしれない・・・でも、全然知らない誰かかもしれない・・・でも俺は俺の未来をつくる！！！！

????

「か・・・奏さん！！！！好きです！付き合ってください」

奏さんは戸惑った顔をして、こちらをチラチラ見る

「えっと・・・好きな人がいるので・・・」

やっぱり零のほうがいいのか・・・

「じゃあ友達から・・・いいですか??？」

「えつまあ友達からなら・・・」

戸惑った顔を変えないまま奏さんは言った

「あの映画のチケットが福引きで当たったのですが・・・一緒にいいですか？」

「うん・・・まあ予定がなければ・・・」

「じゃあ！！明日・・・いいですか??？」

「えっ！明日・・・うーんたぶん大丈夫！！」

「じゃあ明日、学校の南口で！！」

「うん！！」

そういうと、奏さんは笑顔で手をふってどこかへ走っていった

奏

授業時間にて

ハアまさか学校体験っていうか散歩？しているときに告白される
とは・・・っていうか告白って・・・

「どうしたんだ？？さっきからブツブツなんか言ってる」

隣の席の零が心配そうに聞いてくる。零は私がブラックボードに
洗脳？されていたら、小さいことでも心配されてくれるようになった。
た。

「ああ、なんでもない！ちょっと明日さそわただけだから」

「誰に・・・？？」

ああ言うか・・・もう言おう別に隠すようなことでもない

「えっとそのお告白？されて・・・あつても断ったよ・・・うん私
は・・・ねっで、友達からって事になったから明日、映画を見に行
くことになった」

ふうう、なんかいろいとすつきりした・・・

零

「えつとそのお告白？されて・・・あつでも断ったよ・・・うん私は・・・ねっで、友達からって事になったから明日、映画を見に行くことになった」

おいおいおいおいおい、なんだそりゃあー

「じゃあ俺もついていく！」

まあ別にいいけど・・・さつきから周りの人の視線が・・・

「れ・・・零、授業中だからあとで話そっ！！」

私は焦るように言うと、零はまわりからの視線に気付いてくれた

「おっおう！！！」

はあよかった・・・そこまで鈍感じゃなかった

奏

うーん、でも零だけ連れてくとヤバい事になる気が・・・よし！！

私はバックからケータイを取り出し電話した

「あつもしもし・・・あの明日、映画・・・予定あんの？？うん、

そっか」

断られたが、まだ一人残ってる!!

「もしもし・・・うるさい!!・・・あつゴメン・・・明日、映画行く??あつうんじゃあ南口で!!」

次の日

私は南口に早めについた

「あれえ、誰もいないや・・・」

4分後・・・あつ・・・零だ!!!!

「おはよう!早いね!!」

「奏のほづがだいぶ早いっつうーの!!」

「だってえー零に早く会いたかったんだもん!!」

私はウィンクをして、言った

零は顔が赤くなったのを下を向いて隠した

次に告白男子の跡あとかべしん加辺晋吾君が三番目に来て

「もう一人、呼んでるから!!」

予定集合時間から10分後・・・あつきたきた

「ゴメーン！用意があちよつといろいろあつてえ！！」

そう私が呼んだのは佳奈さんで・・・ってふつつわかるか・・・

「おはよう」

私は挨拶をしたのだが、無視されしかも、零に抱きついていて！！

やめろーーーーー・・・そう叫びたかったが我慢した

第十九話 恋愛映画！！

「おはよう」

私は挨拶をしたのだが、無視されしかも、零に抱きついてる！！

やめろー！ー！ー！．．．そう叫びたかったが我慢した

もちろん嫌われないためだ！

「じゃ．．．じゃあ行こつ！ー！」

「ああたしかF映画館だよな？？」

「え．．．そうだっけ？晋吾君、何処？？」

「えつとF映画館であつてます」

なんか負けた気分！まあいつかってまだ佳奈さんが抱きついてる

「行こつ．．．」

晋吾君は私の手を取り歩き出した．．．って手つかまないでー

「あつ．．．う、うん」

しかたない．．．我慢我慢！！

零

「えつとF映画館であつてます」

おっあたたた！！

おい！佳奈！話せ！！やっぱり子供だ！！こいつ！！

「行いっ」

あっライバル《しんご》！！

「あっ……うん」

ガァア奏！待てよ！！って

「佳奈！！離せ！！！！」

「ええー零と二人つきりじゃん!!ねっ!!」

おいおいおいおいおいおいおいおいおい

「離せえええええええええええええええー」

奏

「離せええええええええええー」

・ ・ ・ 零ゴメンなさい

「奏さんって零さんの事、好きなんですか??」

「えっ・・・あっ」

私が戸惑つてると

「あっ・・・すみません、今の忘れてください!!」

「えっ・・・あっうん」

10分後・・・

「わりいー、こいつ《かな》が離れなくて・・・」

私と晋吾君は5分前には、もう映画館についていた

「ムムウ、零と二人つきりになれそうだったのに!!」

だいぶ二人つきりだっただろ!!

「あっそろそろ始まるみたいですよ。チケット買いに行きましょう!!」

ああ、零が心配だよおおおおー

「あっうん」

もう佳奈さん呼ばなければよかったああー

「奏ー買ってきてくれーこいつを追っ払うからっ!!」

「ムッ私から逃げよう！！」

ああ零・・・やっぱり良い人だなあ・・・って感心してるひまでもない人多すぎ！！

ドッカーーン

おいおいこんなときに敵ってあれ?? ドア開けた音だった

「なんで零君も来るって言うてくれなかったんですかー！！！」

ああ葵さんも来ちゃったかー

「おっおいコイツらも一緒に見るのか??」

零が半分きれた状態で言う・・・

「えっあっうん・・・なんかゴメン」

「ハアアアアア」

零は大きいため息をつく・・・マジでゴメンなさい

「いいやつ!!このまま行こう!!」

このままって零がとられるのはイヤだよ!!

チケット売り場にて

「えっと、この映画で三人をコッチ側で二人反対のコッチね!!」

おおナイスな事を思いついたね！！私と零と晋吾君で1グループ
って事ね！！

「じゃあ3と2に分かれるんだよね！」

「ああ三人グループは佳奈と葵と・・・晋吾ってやつで」

えっあっええええ私と零で二人つきり！！死んじゃう・・・あ
る意味！！

「ええーズルいです！！なんですか！！」

「そうだよお二人つきりになって将来のこ・・・グハッなんで叩く
のだー」

「・・・」

葵さんと佳奈さんは反論を晋吾君は・・・ちよつとドンマイ！！

「っていうかチケット全部俺の金で買ったんだけど！！」

零が言う・・・なるほど！だからわざわざ自分のお金をけずって・
・・・ってなるほどじゃないよお

「てわけで行くぞ奏！！」

零は私の手を取り、どんどん奥へ歩いていく

「でも・・・いいの？」

私は半分心配と半分喜びの声で言った

「いいんだよ！もしアイツ《しんご》が敵だったら・・・」

えっもしかして心配してくれたの！

「えっとその・・・ありがとう・・・心配してくれて・・・」

零の手があつたかい・・・耳まで真つ赤な顔を見せないようにど
んどん前に進んでいく

「奏・・・俺・・・いや、なんでもない」

なにを言おうとしたのか分からない・・・

「ついたぞっ！！」

「えっあっうん！」

ビックリしたあー

今回みる映画は恋愛ものらしい

零

映画が始まった

2時間後

「フウ終わった!・・・さあいくか」

俺は横を見ると俺の手をギュツと握って寝ている奏・・・

「おき・・・」

「れ・・・零ありがとう・・・スピーー」

「かな・・・」

「だ・・・だいすきだよぉー・・・zzz」

俺は奏のホッペにキスをしてから奏を起こした

「奏?起きろー」

「零??フワアアアー」

奏は大きなあくびをしながら席を立った

奏

「零??フワアアアー」

私は大きなあくびをしながら席を立った

「零??なんでそんなにうれしそうなの??」

「ん??お眠り中のお姫様に告白されたからだよっ!!」

私は言葉の意味がわからなかった

「誰??誰に告白されたの??」

私は告白という言葉に気付き問い詰めた

「秘密!!」

零は満面の笑顔で言った

「ううー教えてよー」

「そのうち教えてやるよっ!」

そついうと零は私の頭の手をおき言った

「零くん、映画おもしろかったねえー」

葵さんが零のところに突っ込んで言った

「ああエンディングのキスシーンなんか特にな!!」

「キスシーン??そんなのなかったです」

「あっああだつて現実のことだから!」

私達、零以外はみんな、はてなマークを頭の上に浮かべていた

第十二話 晋吾が・・・！？？

「あっああだつて現実のことだから！」

私達、零以外はみんな、はてなマークを頭の上に浮かべていた

帰り道

「零！！誰に告白されたの？？？」

私は真剣な目で質問する

「ああ・・・」

そついうと零は口を耳に近づけ

「奏だよ！！」

ぼそりと言った

「わ・・・私、告白してない！！」

「寝言で言ってた」

あわわわああああー顔が真っ赤になっていく

「じゃあキスした人って・・・」

「そりゃ決まってるだろ奏だよ！」

「えっ えっ 寝てる時に??」

「ああそりゃあって誰にも言うなよ」

「そ・・・そんなの言うはずないじゃん!」

言ったら私ある意味、死んじゃうよあー

「あっじゃ・・・じゃあね」

零は手を振りながら家の中に入っていった

私は顔を真つ赤にしながら手を振り言った

家 奏の部屋

バクバクッ・・・

心臓の音がヤバイ・・・知らないうちに告白してたなんてえー

私はベットでヨコになりながらゴロゴロ転がっていた

ていうか晋吾君に謝ったほうがいいよね・・・私と行く予定だったのに・・・

私はバックからケータイを出して電話をした

「もしもし?天川ですが??あっ晋吾君??今日はゴメンいろんな人よんじやって・・・」

「いいよ・・・別に世界がちがうんだから」

「えっ世界??」

「ボク、見ちゃったんだ・・・奏さんは化け物の言う事を聞き零さんを倒そうとしているところ」

「えっ・・・」

私はびっくりした正体がバレたのだから・・・

「散歩してたら公園のところで奏さんと零さんが戦ってるところ見たんだよ・・・」

「そ・・・そんな・・・」

私は驚きを隠せなかった

「だから、奏さんは正義なんじゃないかって・・・だからボクもブラックバードと契約したんだよ」

「嘘でしょ嘘だよねっ」

「だから、それを報告するために映画に誘ったけどダメだった・・・」

晋吾君の声はだんだん笑いまじりな声に

「しかも君は零のほうの仲間だって事も知った・・・」

「わ……私はその事を覚えてない……」

「そう！だから君もボクらの仲間にしようと今、零の部屋にいてね」

「れ……零の部屋??」

「零を殺せば、君もボクの仲間になってくれるだろうフフ……フフ」

「零を殺さないで……零は零は私を救ってくれた、私の大切な人なの!!」

プー
プー

電話が切れた

私は、急いで階段を降りて零の家へむかった

「ハアハア零・・・」

零の家につくとアポロンが言った

「スゴい魔術じゃ、気をつける」

「う……ハア……うん」

私は零の家に入り階段を昇った

「クククククク無様に死んでいけ!!」

大きな声とともに私は零の部屋に入った

「や・・・やめて!!!!!!!!!!」

第二十一話 晋吾との戦い&零と奏の休み??

「クククククク無様に死んでいけ!!」

大きな声とともに私は零の部屋に入った

「や・・・やめて!!!!」

部屋はうす暗く零達をカーテンの隙間から月の光が照らしていた

「か・・・奏・・・に・・・逃げろ!」

「晋吾君やめて!やめてよ!!」

私は晋吾君の手を零から振り払った

「なんでやめなきゃいけないの??ボクただ君を仲間にしたいただけなんだよ??」

「じゃ・・・じゃあ私!仲間になるから!!もう零を・・・零を傷つけないで!!!!」

とつさに言ってしまった・・・でも答えはこれしかないだろう

「ば・・・バカ、奏・・・逃げろ」

耳を澄まさないで聞こえないぐらいの零の声が聞こえる

「でも・・・こうしないと零が死んじゃう・・・私のせいで皆を傷

つけたくない！！！」

私はいつの間にか泣いていた

「クククじゃあいこう奏さん！ボクと一緒に・・・」

「奏・・・行くな・・・」

零が必死に言うが私は泣きながら首を横に振る

「零のこと好きだったよ・・・これからも・・・でももうお別れかも」

涙が止まらない・・・止めれない・・・

零

「零のこと好きだったよ・・・これからも・・・でももうお別れかも」

「奏・・・」

俺は、力を振り絞り奏にゆっくり近づく

「零・・・」

奏がコッチに来る

「奏、絶対助ける。どこに行っても絶対に」

奏

「奏、絶対助ける。どこに行っても絶対に」

零・・・でも最後の切り札はまだある！！

「零・・・佳奈さんは??」

零はビックリした顔で言う

「え??そういえば出かけてて・・・」

「じゃあそろそろ帰ってくるね?晋吾君!!」

そうだ!女神がいれば、絶対に!!

ガチャ

「ただいま」

来た佳奈ちゃん

「クツ!!女神が2人・・・神が1人・・・まあいいプシユケー様
にかなりのお力をもらったボクに勝てる者はもういない!!」

そうだ。それが一番の問題!

「アポロン・・・倒せる??」

私はボソリと自分^{アポロン}に話しかけた

アポロン」

「大丈夫じゃ！！奏殿」

「アポロン・・・来たか・・・」

ゼス殿は壁によっかかり、ゆっくり立った

「どうしたのー？？やけに静かってうわあああ何この戦いシーン
！！」

おお佳奈殿もきたのか

「えっと女神にかわってもらえないか??」

わらわはまだ佳奈殿の女神がどんな方が知らない

「あつうん！！いいよ」

「私の名はテミス！！佳奈はいつも掟を守らずスマン」

「まあまあじゃ！とにかくあいつを倒すのじゃ」

「分かったが・・・零が退けてくれなければ私の術は・・・」

「ゼス殿、邪魔らしいぞ？」

「あっああわかった」

ゆつくりと歩き出す、この調子だと何時間かかるか

「わらわの肩をかすぞ！」

「ああセンキュー」

零は肩に手をおき歩き出した

「じゃあ私はやってるからな！」

テミスはそういつが手伝えって言いたい

「ああいいぞ！！」

零は言った。こいつもよく女だらけでやってけるなあ

「掟術式第27番機・・・正義柱の刑」

正義と大きく書いた柱がどこから出てきた

「佳奈の者をよく・・・殺そうとしたなああああああ」

恨みがスゴい人じゃ・・・

柱は晋吾殿に落ち結構痛そうじゃ

「フハハハハこんなもんで私は滅びるか！！」

晋吾殿の声がどこからかする

「天界術式第75番機・・・善と悪の区別」

わらわは悪を滅ぼす術を使う

[illegible]

なんじゃコイツ!!だが、奏の為じゃ!!

「グッグハハハハ・・お前は人間を殺したその罪は消えないぞ
フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

晋吾殿の姿は粉になり光になり最後には消えた

奏

「大丈夫??零??大丈夫??」

私は、零のそばで泣き零は私を抱く。ドキドキするけど今は零の体のほうが心配だ

「大丈夫だ！！こうみえても神の血もひいてる・・・」

全然大丈夫に見えない！！

「今日は私が一緒にいてあげる！」

私は看病の為にそういった

「ああありがとう」

夜だったから今日は零の家に泊まることになった

布団にて

零の家には零のベットしかなく、佳奈さんはいつもソファで寝ているらしい、だから私は布団で寝ることになった

でも、零の部屋！

「零??起きてる??」

「ああ起きてるけど??どうした??」

「眠れなくて・・・」

「じゃあ眠らせてやろうか??」

「えっどうやって??」

「目・・・目をつぶって・・・」

なんだろう??よくわからないまま目をつぶった

「俺、お前のことが、もっと・・・もっと好きになった・・・」

「えっ・・・」

「しゃべんな!」

「だから、今からやることは本気だからな!」

零はその後、私の唇にキスをした

「れ・・・零」

私の心臓の音はすぐくはやくなる・・・

「じゃ・・・じゃあおやすみ」

零はそのままベットに入り込んだ

零・・・いきなりキスって・・・逆に寝れないよおお

次の日

私は枕の近くにおいてあった服に着替える・・・

「あれ??」

一番下には一つの紙が置いてあった

「えっと、零から?かな??」

その紙には次のように書いてあった。H市の海岸公園で待つ

私はその紙を読んですぐ着替えた

海岸公園にて

ここは海で遊べるし、有名なデートスポットだ

私は海のほうへ歩いてた

「見つけた!!」

えっ誰?? 零? 零の声だ

「零!!」

私は後ろに振り返る

「今日は奏を独り占めしたくて・・・」

どうやら、昨日のこともあるみたい・・・

「えっ・・・」

零は私を海のほうへ連れてった

「俺、海、無理だから」

「えっ!! じゃあ見てよっか」

「ああ」

零は砂浜に座り海を見る

「奏・・・俺、眠くなった」

零はコツチを向く

「えっ寝ちやうの??」

「眠気覚まし・・・」

零はコツチをむいた

「えっ??」

私はよくわからなかった

零はいきなりコツチに倒れてくる

「んっ」

零が倒れたところは私の口と零の口がちょうどかさなるところだった

おきれないよおおおおおお

心臓のドキドキはもしかしたら私の胸を通じて零に届いてるかもしれない

零は私の顔の横に手をおいている

わたしは手を広げた状態

零は寝ている・・・

私も一緒にねてしまった

夕方の海岸公園にて

私がおきると零はまだ寝ていた

私、こんな状態で寝ての??

ちょうどパラソルで皆には見えなかったらしいがこれはヤバイ

「ん??」

零がおきたようだ

零はおきあがり口と口をはなした

「わりー寝てた、でも、もうちょいいいかな・・・」

「えっ・・・うん」

私と零は立ち上がり、夕日がきれいな海で、夕日の光に照らされながら私と零は大人なキスをした

帰り道

私達は顔を真っ赤にしながらも手をつなぎ歩いていた

家

「もう、どこ行ってたんだよぉ」

佳奈さんにはいろいろ言われたいへんだった

自分の家に帰りケータイを見ると、なぜか零とのキスシーンの写真がとられていた

第二十二話 ひ・み・つだよ!!

家

「もう、どこ行ってたんだよおお」

佳奈さんにはいろいろ言われたいへんだった

自分の家に帰りケータイを見ると、なぜか零とのキスシーンの写真がとられていた

「な・・・なんで・・・」

私はビックリして大きな声をあげた

「わらわが撮っておいたぞ」

ファッション確認の為に買った大きな鏡にうつった私が言った

「な・・・なんで撮るの!!! しかも待ち受け画面に登録してあるし
!-!」

「なんじゃ! お主らのことを思ってたことじゃぞ!-!」

零もこれは知らなかっただろう・・・寝てたし・・・

「まあ、いいやつ!! でも今度からはちゃんと私に言うてからね!
!」

「お主は寝てた」

「むうううううう」

私はなんか負けたような気がして腹が立ってた

次の日

私からしたら久しぶりの学校って感じがする

昨日はいろんなことがたくさん起こったので、その日は何日もたつてるような気がした

登校中、零と佳奈さんが一緒に登校してるのが見えた

佳奈さんはとても元気で零はとても疲れたって顔をしていた

「おはよう」

私は隣まで来た零と佳奈さんに挨拶をした

「ああおはよう」

「おっはよおおお！！！！！！」

零は声も疲れた感じで佳奈さんは全然まだまだってくらい元気だった

「零、大丈夫??」

私は零が心配で仕方がない・・・

「ああこいつ《佳奈》がいろいろズカズカとな〜」

まあいろいろあったらしい

「〜それと昨日のことは誰にも内緒だからな!!」

昨日・・・長時間のキスが頭にうかぶ

私は顔を真っ赤にしながらコクリとうなずいた

「何??昨日どうしたの?? ねえー教えてよおおおおおおお
おお」

佳奈さんが問い詰めてきた

「電話で話したんだ!!」

零は嘘の証言をした

「どんな!! どんな!!」

さらに質問してくる佳奈さん

「子供に言えねえ秘密!!」

零は大きなため息を出しながら言った

「子供じゃないよおおおちゃんとした高2ですが??」

「見た目が子供だからダメ!!」

零は佳奈さんを子供あつかいし、ばれないように言い返す

私だったら、もうばれていただろう・・・

学校にて

キンコーンカンコーン

久しぶり?に聞く鐘の音

「今日の自習は算数のドリルだからやっというてえー」

加藤先生はそう言うと言室を出て行った

「ねえ晋吾君さあ外国に転校したんだって!!」

そんな噂がたっていた・・・晋吾君のこの噂はブラックボードが流したのかもしれない

「外国ねえ・・・」

私はそうつぶやく

「なんだ奏、もしかして外国に行った事ないとか?」

零は嘘だろーって顔で言った

行った事ないけど悪いかああああ

「ないけど・・・ダメ??」

「そうなんだああ」

朝の事が気になって佳奈さんは零の席にコソッと来ていた

「お前《佳奈》なんでここいんだよ!!」

零はちよつとキレたような顔で言った

「零いい怖いいいいー」

佳奈さんはからかうように言う

「殺すぞデメエエー」

零はついに我慢できなくなり大きい声で言った

「うーゴメンー怒らすつもりは・・・なかったウグッ・・・」

佳奈さんは泣きながら謝る

「やっぱり零って不良なんじゃない??」

晋吾君の噂よりも零の噂のほうが大きくなる

「ウグッウウ」

佳奈さんはまだ泣いている

「奏……どうにかしろよお」

ほとんどのクラスメートが私にそう言ってくる

「な……零、許したら???こんなに泣いてるんだよ?」

「奏が言っただけでいいよー許す!」

零はキツパリ佳奈さんに言っ

「やったー!!」

佳奈さんはいきなり元気になり、さっきまで泣いていたとは思えなかった

第二十三話 真実？現実？

「やったー！！」

佳奈さんはいきなり元気になり、さっきまで泣いていたとは思えなかった。

パチッ！

目が覚める・・・私は寝ていたのだろうか？

じゃあ、零とキスしたことも夢？

ピンポーン

私は一階から聞こえるチャイムのかすかな音を聞き逃さなかった。

誰だろう・・・私は時計をチラリと見る・・・

「九時？・・・あっ今日、学校だ！」

私は学校だという事が分かり、急いで一階にいき玄関のドアを開けた

「奏、おせえーよ！何時間ココでコレを押してたと・・・まあいい、さっさと行くぞ！」

外に立っていたのは、零・・・今、聞こうかなキスのこと・・・

「零・・・私たちって二人で一緒に海に行った？」

「行ったけど？どうした？記憶喪失？」

零は心配そうな顔になる。

「だ・・・大丈夫！」

「まあ海に行ったとき寝ようとしたら、奏が鼻血だして倒れたのはビックリしたな！」

えっ！??? 本当に？いつの間にかこんなに妄想好きに・・・

「そうだったけ？」

「ああビックリしたから抱っこしてココにつれてきただろ！」

たしかにそんな感じだったかも・・・ホッとしたけど、なんか惜しい感じも・・・

「あっ学校の用意するから・・・さき行ってていいよ！」

「行かねえーよ！佳奈を先に行かせてまでも待ってたんだから・・・」

零は顔を隠すように下を向く。私は、歯磨きや顔洗いの為に洗面所へ走っていった。

十分後・・・

「ゴメン、じゃあ行こっか！」

私は、すべての用意を終わらせ零の所へ行った。

「ああーかなりの遅刻だぜ！」

零はケータイの画面を見て言う。

学校

「ハアハア・・・」

相変わらず、この三階までの階段は辛い・・・

「大丈夫か？」

零は楽勝！みたいな顔をして言う・・・意外と辛そうだ。

「だ・・・大丈夫！」

階段を走る・・・教室の前まで来た。

「ハアハア・・・」

まだ息は荒い・・・ゆっくりと息を整える・・・

「よしー！」

息が整い教室のドアを勢い良く開ける

「遅れてすみませんでした！」

私と零は同じタイミングで同じ言葉を言う

「ねえ、零と奏って付き合ってたの？」

最近はその噂も聞くようになったし、一緒に教室に入ってきた、この状況でもコソコソと言っている人もいる。

第二十四話 零、失恋の危機!??

最近はそんな噂も聞くようになったし、一緒に教室に入ってきた、この状況でもコソコソと言っている人もいる。

「かなつちー、今日、日直だよぉー」

「えっ? あっ! 忘れてた!」

私は、窓側の一番後ろの席に座り、授業の用意をする。

今日は朝から数学で、不運だ! と私は思った。

授業中、今日はだいぶ前に習ったところの復習で結構簡単だったので、ずっと校庭をボーッと見ていた。

キンコーンカンコーン

「かなつち? 日直の仕事、やった?」

「あ! 忘れてた!」

最近、いろいろとボーッとしている。

「今日、俺も日直だから・・・」

横から男子が話しかけてきた、大野悠也君おおのゆうや、スゴくモテるらしい。

「いいなあ、悠也様なんて・・・」

そんなことをボソリとつぶやく女子もいるほどだ！

「悠也君ってモテるんだ」

「そんなことない、好きな人は振り向かないからな！」

「へえー、好きな人いるんだー」

「ああ・・・片思いだけど」

悠也君は顔が赤くなってきたらしく顔を下に向け隠す。

あと、日直の仕事は次の授業の用意をするのだ！

次の授業は理科で結構重い実験用具を一人で何個も持つのは大変だ。

「あつ、重い？持つか？」

悠也君は、重くてフラフラ歩いていた、私に気づき言う。

「え・・・あつだ・・・大丈夫！」

なんで好きでもないのにドキドキしてるの・・・私のバカ！

「そろそろ効き目が出てきたかな・・・」

裕也君はボソリと何か言っている。

「奏さん・・・って・・・」

「あっ奏でいいよ!」

な・・・零以外その言い方は・・・

悠也君はなにやらガッツポーズをしている。

「奏・・・好きだ!」

いきなり告白!当然ゴメンだろっ!

「うん・・・」

なんでOKしてるの?私なんかおかしい・・・

「やった!さすが俺のお父様!」

へ?何が?

「あっそうそう、奏は今日から俺のものだ!」

いきなり意味がわからない・・・ていうかさっきから頭がモンモンしている。

「えっ・・・悠也君の・・・ありがとう!とっても嬉しい!」

悠也君は笑ってる、どうしちゃったの・・・私も悠也君も!

「そうだ!零には嫌いと言っても言っつて縁を切れ!」

ヤダヤダヤダ

「うん！わかった」

キンコーンカンコーン

体が言う事を聞かない・・・零に話しかけたらどんなことを言うか・・・

「どうしたんだ？奏？」

零が話しかけてきた・・・ダメ私！言っちゃダメ

「嫌い・・・私、悠也君と付き合うことになったから」

なんてこと言ってるの・・・

「なっ！奏それ本気か？」

本気じゃない・・・なんか変だよお操られてるみたい

「うん！本気だよ！」

私のバカバカ最後にかけてよう・・・

「た・・・助け・・・て・・・零」

やった、ちょっとだけだけと言えた。

だけど零は険しい表情で気づいていないようだ。

キンコーンカンコーン

授業が終わる。

「奏、一緒に帰ろう」

零は言う。

「ヤダ！」

なんてこと言ってるの私のバカ

「奏、帰ろうぜ！」

今度は悠也君だ！ここは当然や・・・

「いいよ！帰ろう！」

なんだこの差別みたいなの・・・零・・・

帰り道

「そうだ！奏、俺のことは悠也って呼べ！」

「うん！悠也！」

今まで零しか呼び捨てしたことないのにー！

「俺の家で遊んでから帰ろう！」

「うん！超うれしい」

超イヤだ！

悠也君の家

とても豪華だ！

「俺の部屋で二人っきりで遊ぼうぜ！」

「うん！」

悠也君は家の中に入り結構、奥のとても大きな部屋に入っていた。

ガチャ

そこにはたくさんの絢爛豪華な調度品などが置いてある。

その中でも一つ、黒くちよつと不気味だけどなにか引き付けられる感じの黒の真珠のブレスレット

「ああーこれはね奏とお揃いでつけたくて買ったんだ、つけてくれるかい？」

「うん！とっても嬉しい！」

私が思ってもいないことを言うと悠也君はニヤリと笑う。

いるのだろっ。

「奏！大丈夫か！」

「助け・・・助けて・・・ハアハアに・・・逃げて・・・逃げないとまた零と戦うことになる・・・だから・・・」

「イヤだね！俺は奏を守る・・・そう決めた」

「零・・・」

悠也君は諦めたようにブレスレットを壊す。

悪が消えていく、心がホッとしてきた。

「零、悠也君、ありがとう！」

きつと今までにない最高の笑顔だっただろう。

零と悠也君は顔を下に向けた。

第二十五話 夢の中へ

「零、悠也君、ありがとう！」

きつと今までにない最高の笑顔だっただろう。

零と悠也君は顔を下に向けた。

次の日

私は零と佳奈さんと葵さんと学校へ

「奏、昨日、大丈夫だったか？」

「うん！零が守ってくれたから！」

「何の話ですか？」

「何の話をしてるのだ？まぜてまぜてえええーッ」

零君は佳奈さん達に何も言わずに私を助けに来てくれたらしく佳奈さんと葵さんは昨日の出来事は知らない。

「秘密だよ！ねっ、零！」

「ああー」

昨日のことは零にとって最悪の日であって、私にとっても最悪の日だったし誰にも言いたくないのは零も私も同じだから秘密にする

ことにした。

「教えてくださいよぉー」

「教えないと・・・」

佳奈さんが脅すが零に叩かれて佳奈さんは反省した。

学校

キンコーンカンコーン

最近、骸骨・・・じゃなくてプシュケーも現れないので平和だ。

「今日は転校生が来てます。」

今年は転校生が多いな、と思いながらも私は零のほうを見る、零も転校して来たんだっけ・・・

「なかむらあかり中村朱莉です。よろしく・・・」

ん？どっかで・・・ってどっからどう見ても結花じゃん！

「ハア、また敵かぁー」

零がボソリとつぶやく。

結・・・朱莉さんは廊下側の一番後ろの席で移動してるときに「チラをチラリと見た、やっぱり結花だよ。」

キンコーンカンコーン

朱莉さんは休み時間なぜか……って敵だからだと思っけど私のところに来た。

「奏さんって私に会ったことある？なんかつかしいって感じで……」

「えっ、会ったことは……ないと思うよ」

他人だったら……ね……

「奏！」

零が私を朱莉さんから離す。

「また、変なことになると厄介なんだよ！」

ボソリと零が言う……きっと心配してくれたのだろう。

「奏さん……零君ってカッコイイですね、私、一目惚れしてしまいました」

えっ、零を……

「そ……そうなんだ……アハハ」

私は誤魔化すように笑う。朱莉さんはその不自然に気づくが言葉に出さない。

「ねえ！零君って付き合ってる人とかいるのぉー？」

私と話してる隙に入ってくる、本当に好きなの・・・零のこと結花ぁー・・・

。 零はその質問に顔を真っ赤にする、私が目の前にいるもんね・・・

「そっか、いるんだ！誰？」

「か・・・かな・・・」

「えっ！奏さん！」

朱莉さんはグサグサと質問しグサグサと当てていく。

「奏さん！今日から恋敵ライバルです！」

「へっ？」

良く分からない・・・結花・・・じゃなくて朱莉さんは零のことが好き？なの・・・

朱莉さんは私をギロリと睨むと朱莉さんは自分の席へ向かって、何かを取り出し、またコチラに戻ってくる。

「じゃあ、零君！私、コレあげる！」

そこには黒い紐で作られたミサンガ、ただのミサンガには見えなかった、何かこう・・・黒々とした何か・・・

「奏さん？」

晋吾君だ！

晋吾君は私の手を掴み廊下へ引つ張る。

「ちょっと零が・・・」

ダメ零あれをつけたら・・・

「奏さん・・・ボクからのプレゼント・・・つけてくれる？昨日のお詫びで・・・」

そこには虹色の紐で作られたネックレス・・・きれい。

「え・・・あつ、うん」

私はそれをつける・・・な、何これ・・・なんだか眠く・・・

ボタン

葵

「奏さん！大丈夫ですか？奏さん！」

奏さんは廊下で一人、いきなり倒れたらしい・・・

「奏さん！」

零君は朱莉さんと楽しく話している・・・どうしちゃったの皆！

零

「奏さん！」

クツ・・・奏・・・これ奏も昨日、体験したんだな・・・結構辛い・・・

「ねえ零君・・・私、零君と一緒に私の家に住まない？」

「ああーいいな！朱莉の家、見てみたい！」

なんだ俺！てかなんで呼び捨てなんだよ！馬鹿！敵だぞコイツ

「なんか、騒がしいから校庭いこっか！」

「ああー・・・こんなうるさいところより、朱莉と二人っきりで・・・」

なんだこの俺のバカバカバカバカバカ

奏

ここは何処だろう・・・

私はどうしてこんなところに・・・

ここは、天国？地獄？・・・それとも・・・

これは夢？私って誰？名前は？生年月日は？歳は？・・・わからない・・・

「……何処？」

私は文字だらけの世界に一人ポツンと立っていた。

なんで誰かいないの私は・・・ここで一人ですと生きていたの？

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
オオオオオオオオオオオ

何の音
・
・
・

地面は砂なのに下へ下へと落ちていく、アリ地獄のように……

ド
サ
ツ
・
・
・

ここは何処？

そこは砂だらけのところ、一人の男が立っている。

誰なの？ここは何処なの？教えてよおー、ここは？あなたは？

目が覚めると、そこは王国だった。

「私は……奏……今のは夢？」

[illegible]

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

王の椅子には一人の女・・・この人は誰？なの。

「その庶民よ！私、プシュケーの前だ！ひざまずけ！」

第二十六話 王女様とのトーク！

「その庶民よ！私、プシュケーの前だ！ひざまずけ！」

プシュケーと名のる少女は、たぶん私に命令しているのだろう・
・プシュケー？ん？あの骸骨の・・・

プシュケーは女？それとも同名の人なのだろうか？ここは日本
じゃないの？プシュケーって！

「そこで何を突っ立っておる！私の前じゃ！無礼者は処刑場に連れ
て行くぞ！」

しょ・・・処刑場？えええー私、殺されるのだけはイヤだ！

私はそこに正座をする。

「なんだ！その座り方は！庶民は庶民らしい座り方があるだろう！」

庶民らしい座り方？ってなんだよ！

「プシュケー様！クーロ様が来ております！」

「クーロが！」

プシュケー・・・様？がクーロ・・・様？って人？が来たと聞くと
プシュケー様？は王の椅子から飛び降りどこかへと走っていった。

「お前！名前は？」

後ろからそう聞かれ振り返ると零に超そっくりな男の人がたっている。

「えっと、か、奏です・・・」

「カナデ？」

あつ！そっか！現代社会では普通だがここではカタカナの名前が普通なのだろう。

「あつ、えっとアポロンです」

とつさに思いついた私の中にいる女神の名前、アポロン・・・なんかがゴメン。

「俺は、ゼウスだ！」

ん？ゼスが零だったから・・・その親？

「あの！お子さんっていますか？」

「ん・・・ああーゼスならいるぞ！」

「い・・・今、何歳ですか？」

「二歳」

ええええええ・・・でも神と人間では神のほうが寿命が・・・えええ！じゃあもしかしたら今の零は私より年下？

「え！あのゼス君は人間のほうの寿命ですか？神のほうの寿命ですか？」

「残念ながら人間だ！」

「いやいや！じゃあ私、喜びますよ！」

「今、どこに？」

「人間界だと思うが？」

「おおーナイスだあーそつかお父様は王女様に仕えてるのですねってプシュケーってことはここは悪？の組織の場所？」

「えっ！あのおじ様はココで何してんですか？」

「ああーマル秘ってやつ？」

「わ・・・私！ゼス・・・零と友達で女神が入ってて、ココになぜかいるんですよ！」

「な！・・・逃げろ！お前も道具になる！俺は身分を隠して侵入しているんだぞ！」

「なるほど！さすが善の人だ！」

「何をしている！私の獲物だ！」

「私って獲物？」

「えつとだ女神入りの娘と！私と手を組まないか？」

「骸骨のときとだいぶ性格が違うね」

「ああーあれは仮の姿っていう感じだ。」

「仮・・・ねえ・・・本当の姿で本当は誰かと楽しく遊びたいんじゃないの？」

「な・・・そんなことないぞ！ココならすべての者を従えさせることができる！ここにしかないことだ！」

「プシュケーはそれで満足してるの？」

「ああー悪いかな？」

プシュケーは王の椅子に座る。

「なんで自分だけ満足して他の皆を傷つけるの？」

「私は・・・私は、神になんかなりたくなかった、神にした人々は私を傷つけた！そのお返しだ！」

神になった？

「あなたは元々、神じゃないの？」

「お前には関係なからう！」

「そっかプシユケーも黒幕に自分の感情でかられたんだ」

「どういうことだ！」

プシユケーは身を乗り出し言う。

「だって、そんなことを考えてたら誰かにこの仕事を頼まれてそれでただ満足してるんでしょ？」

「ちがッー私はただ私は・・・」

「私は？」

「・・・いいじゃん！仕返しぐらい・・・」

「ぐらい？あんたのせいで私だって危ないことになったし、学校の皆も巻き込んだんだよ！分かんないの？自分が傷つけられたら、もう傷つく人がいなくなるように努力するのが普通なんじゃないの？」

私は必死という感情を顔に出す。

プシユケーは涙目になっている、誰にでも感情はあるもんな、少し言い過ぎたかも・・・

「この者を処刑場に連れて行け！」

ええー処刑って逃げる気！

私は牢屋のなかに連れて行かれた。

第二十七話 孤独の果てに・・・

「この者を処刑場に連れて行け！」

ええー処刑つて逃げる気！

私は牢屋のなかに連れて行かれた。

プシュケーー

「この者を処刑場に連れて行け！」

女神入りの少女が連れて行かれた。

「わ・・・私は部屋に戻る！」

タッタッタッ

ポフッ

部屋のベットに飛び込む。

「ううーッうううううう」

私は泣いていた。

あの女が言ったとおり、逆らってればよかったんだ、逆らってれば・・・でも、どうやって逆らってればよかったの・・・

十年前

「ねえ、お母様！私！お姫様になりたい！お母様みたいに沢山の人に信じてもらえる仕事だから！」

「きつとなれるわよ！私の娘だもの！良い子にしていればきっと・・・」

「

「分かった！私、良い子になる」

でも、お母様にとっての良い子は、悪い子だった。

五年前

「お母様、私、いつになったら女王になれるのですか？」

「フフツ・・・完璧な良い子になったらよ」

完璧な良い子、お母様にとってはそうだったのかもしれないが、私にとっては完璧な悪い子になれと言われているようなものだ。

毎日、洗脳されるような言葉の数々とお母様の絶対の言葉、逆らったら殺されるだろう・・・きつと、それが私は怖かった、死にたくなかった。

プシュケーの部屋

「殺されなくなかった、でも逆らいたかった、逃げたかった、でも、でも、でも、でも、でも・・・」

私は・・・私は悪でなければなかった。絶対のお母様の命令だったから・・・。

お母様はどうかしている、そう思っている。お母様は善ではなく悪だ。

「どうやったら。どうやったら。どうやったら。どうやったら。どうやったら、逆らえるだろう。逃げ出せるだろう・・・そうだ、そうだ！あの娘だ！一緒に逃げればきつと・・・きつと」

私は最初小さな声で言っていたがだんだん大きくしまいには大声となっていた。

私はベットから離れ立ち上がる。

ガチャ・・・カタッタッタツカタツ

「私に従う者達よ！私は処刑場に向かう！」

私は王の椅子を通り過ぎ、玄関に向かった。

「・・・そうだ！」

コイツだ！最近はいってきて、それなりにエラそうだ！もしかしたら・・・

「そこの使いよ！」

「なんでしょう王女」

「私と一緒に来い！」

「ハッ！」

今、初めて話したがすぐ分かった、コイツ、最初入ったときベテランとか言ってたが嘘をついていた。

私は馬車へ向かう。

「プシュケーー！どこへ行くのですか！あなたは・・・」

お母様だ！もうお母様なんか捨てる！

「私は・・・プシュケーーは自分の道を自分で決めて歩いていく！お母様は邪魔しないで！」

「チッ」

お母様は舌打ちをし、ポケットからナイフを取り出す。

「王女様、行きましょう！」

さっき頼んだ使いが私が殺されるのを阻止してくれた。

馬車は走り出す。

お母様はだんだん見えなくなっていく。

「ありがとう・・・」

久しぶりにお礼を言った。

「王女様でもお礼は言えるんですね」

「お前も嘘をつくうえ普通の者だったら手を出さないのに私を守ってくれたではないか」

「ああー、バレたかあー」

やっぱりコイツただの庶民ではなさげ・・・。

「お前・・・何者じゃ！私はあのこから逃げる！あの娘とともに！」

「ああー奏ちゃんとか？まああの子が許せば良いんじゃない？」

何と言う無神経な男だ。

「ついぞおー」

男は私をバカにしているようにも見えた。

タッタッタッタッタ

「ハアハアハアハアハア・・・その娘よ！私と一緒に逃げるつもりはないか？」

私は奏？とかいう娘に質問する。

「おっ！やっとー！！その言葉を待ってた！OK付き合っよ」

やった！この娘はきつと何か不思議な何かを持っているだろう・
・そう思った。

ガチャ

「じゃあ人間界に行こっか！」

娘は私に向けて手を差し伸べる。

「うん！」

私は娘の手を掴み共に走り出した。

人間界

「ココが人間界か・・・」

私は人間界というのは始めてだ！

「そう！でココが私の家・・・って零？」

「あっ！奏！何処いったんだ？学校で奏が瞬間移動して何処か行
ったって話に・・・コイツは？」

「コッ・・・コイツとは無礼な！私はプシユケーだ！」

「プシユ・・・奏！離れろ！コイツは敵だ！」

「もう敵じゃないよ！プシユケーは・・・仲間だよ！」

仲間・・・私はコイツらの仲間！

「・・・奏がそういうならいいけど・・・人間界で暮らすんだっただけで・・・あああああ！」

偽名？・・・そっかココは人間界だもん・・・ってこの男どこかで・・・あああああ！

「お前！私の使いでお前の父親っぽい人がおったぞ！」

「親父が？ありえないな！親父は神様だし！」

「なっ・・・アイツ神だったのか・・・だから・・・」

だからあんな親しい仲の人と話すような言葉使ってたのか・・・

第二十八話 庶民の場所へ

「なっ・・・アイツ神だったのか・・・だから・・・」

だからあんな親しい仲の人と話すような言葉使いだったのか・・・。

「って言うか！お前は何者だ！私の名を知っておるらしいが」

「あっ・・・って敵として扱っていたのに名前を覚えてないのか？」

「むうーもしやゼ・・・ゼス？ではなかったか？」

「そうだけど、ココでは柳澤零と呼べ！」

「そうか、零！では・・・私は鷹梨鈴たかなしすずでいいかな・・・」

「なんで名前が思いつく！」

「うーん。なんとなく？」

「そう・・・」

たしかに言われてみればどうしてだろう。

「まあお前も学校行かないといけないからな！」

「学校？ああーあの庶民が通う所ね！」

第二十九話 地獄の王女の日

「私が庶民に??」

「じゃないと人間としてダメだし、捕まるの早くなるだけだぞ！」

たしかに、もうあそこに戻るのはイヤだ！

「わかった・・・」

奏

次の日

「おはよー」

「おはよう・・・ございます? だっけ・・・」

プシュ・・・じゃなくて鈴ちゃんは昨日、学校に行く為だけに敬語などちゃんと生活するための言葉使いを練習した。

「そう! あつ、今、ご飯を温めてるからその間に学校への用意をしてたら?」

「昨日のうちにやつ・・・やりました!」

やったとでも、言いたかったのだろう・・・。

「おおー用意が良いねえ」

「エへへ・・・」

笑うときは普通なんだ・・・

学校

キンコーンカンコーン

学校の鐘が鳴る。

「今日は転校生が来ています」

「今年って転校生が多いよね・・・えっと四人目？なんか裏であんじゃないの？」

そんな噂も広がりつつある。

ガラガラアアア

「え・・・えっと、鷹梨鈴です。えっと、あの・・・よかった・・・
・・・お願いします！」

ペコリとお辞儀をする、鈴ちゃん。

鈴

キンコーンカンコーン

休み時間、鈴ちゃんの話の話題としてクラスメートと一緒に話している。

「鈴ちゃんってどこから引っ越してきたの？」

「えっ、地・・・えっと、アハハ―」

そこまで決めてなかった・・・。

「地？どこ？教えてよ!」

早くもピンチだ!!

「ええい！私は地獄に住んでて王女だったのだ!」

ハア・・・もう無理・・・学校なんか。

「アハハ―何それ！地獄の王女様！かあ―」

「なっ笑うな！私、プシュケーの前でそんな大声で笑うな!」

「なんかキャラ違う―」

なぜか私の言葉で笑っている・・・そんなに可笑しいだろうか？

「うるさい、うるさい、うるさい、うるさい、うるさい、うるさい
!..!うるさああああいいいい」

「面白―い」

なんだこの者は！

「なんだと！私、地獄の王女、プシケーの前で私に恥を掻かせるなんて・・・さあひざまずけ！！」

「王女様だあーツンデレ王女役？」

何を言っているんだこの女！！

「ツンデレ？知らぬ！！私は．．．私は地獄の王女だあああああ
あああああ」

「可愛い
いい
いい
いい
いい
いい
——
——」

この女はアニオタ？だかという人種？で有名ならしい。

[illegible]

「ハハア……」

女は正座？っていう座り方をして跪いた。

キンコーンカンコーン

鐘により、私の悪夢？から開放された。

放課後

「よおツンデレ王女！」

「零までそんな馬鹿げたことを言うのか！愚か者め！！」

私は零を下から睨んだ・・・私のほうが背が小さいからしかたがない・・・。

「そうかそうか俺は愚か者か・・・そうか、ツ・ン・デ・レ王女！！」

「ムウウウウー」

私は零の頭をジャンプして叩いた。

「いつてなあああー」

零が私の頭を叩こうとしたので私は零から走り逃げる。

「おらああ、待てええええー」

「ハハッ、捕まえられるかっなあー」

私は逃げた。

「???」

「女王様どういたしましたしょう！王女がない今、責任はあなた様にいきます。」

「クッ・・・そうだわ！王女を操り、神と女神を滅ぼすのです！！」

「はい！わかりました女王様」

「あなたは良い子ね！！結花！！」

「全てはあなた様の為ですからアハハハハハハハハハハハ」

「次の王女はあなたでも、良いくらいだわ！あんな使えない娘なんかより！！」

第三十話 イヤな予感？

「全てはあなた様の為ですからアハハハハハハハハハハ」

「次の王女はあなたでも、良いくらいだわ！あんな使えない娘なんかより！！」

奏

「おはよう！鈴ちゃん」

「おはよう・・・ございます奏さん」

私は、ご飯を電子レンジに入れ、温める。

「なんか・・・いやな予感がするのです」

「イヤな・・・って？」

「お母様が動き出しているのです」

「地獄の女王様が？」

「そう・・・女王が・・・」

「大丈夫！私が守ってあげるからね！」

「ありが・・・ありがとう」

キンコーンカンコーン

「ねえ、奏さん！鈴さんとは友達なんですか？」

「えっ・・・まあそうだけど」

「そうなんですか！」

朱莉さんは鈴ちゃんのほうへ走っていく。

「鈴さん！私、朱莉です！よろしくね！」

「ああ・・・うん！よろしく！」

だいぶしゃべり方がうまくなっている。零先生のおかげだね。

「そうだ！」

朱莉さんはバックから、ブレスレットを取り出す。

「コレッ！友達の証として！」

前に、零にあげたのではないので、大丈夫だろう。

「いらな・・・うん！ありがとう！」

鈴ちゃんは断りそうだったがもらうことにしたらしい。

鈴ちゃんはブレスレットをつける。

「ありがとうございます」

・・・？いきなり、うまくなくてない？まあ、練習の成果ってやつ？

「鈴ちゃん！校庭で一緒に話そうよ！」

「うん・・・」

鈴ちゃんと朱莉さんは校庭へ行った。

鈴

なんなの？コレ！！貰いたくないのに「うん」とかって！！もうどうにかしてるよぉー

「さて、この辺なら誰にも聞かれないなっ！」

？この娘さつきと目つきが違う・・・声も少し怖い。

「お前は女王様の命令に従ってればいいんだよ！壊れた操り人形が」！

「はい！わかりました」

なんで、そこでOKしてんの？馬鹿？

「お前は奏を殺せ！」

「わかりました」

「私は零を壊す」

「はい」

「以上だ！あとは今、言ったとおりにしろ！」

奏

「あつ、朱莉さんと鈴ちゃん！お帰り！」

「うん！ただいま」

「ただいま」

放課後

「ねえ、零！私さ宿題のココ分らないんだけど・・・」

朱莉さんは零になんか聞いている・・・まあ仕方ないことだから許すけど。

「ねえ、奏さん！私、気分が・・・」

「えっ、大丈夫！保健室に行こうか！」

保健室

「誰も・・・いないね・・・」

私は、キンキンに冷えているのでストーブをつけた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5478z/>

女神しか知らない恋の道!??

2012年1月14日15時48分発行